

阿部昭編「飯待つ間 - 正岡子規随筆集 - 」岩波文庫、岩波書店 1985年3月18日刊を読む

飯待つ間

余は昔から朝飯を喰わぬ事にきめて居る故病人ながらも腹がへって昼飯を待ちかねるのは毎日の事である。今日ははや午砲が鳴ったのにまだ飯が出来ぬ。枕もとには本も硯も何も出て居らぬ。新聞の一枚も残って居らぬ。仕方がないから蒲団に頼杖ついたままぼんやりとして庭をながめて居る。

おとといの野分のなごりか空は曇って居る。十本ばかり並んだ雞頭は風の害を受けたけれど今は起き直って真赤な頭を揃えて居る。一本の雁来紅は美しき葉を出して白い干し衣に映って居る。大毛蓼というものが馬鹿に丈が高くなって薄赤い花は雁来紅の上にかぶさって居る。

さっきこの庭へ三人の子供が来て一匹の子猫を追いまわしてつかまえて往ったが、彼らはまだその猫を持って遊んで居ると見えて垣の外に騒ぐ声が聞える。竹か何かで猫を打つのであるか猫はニャーニャーと細い悲しい声で鳴く。すると高ちゃんという子の声で「年ちゃんそんなに打つと化けるよ化けるよ」とやや氣遣わしげにいう。今年五つになる年ちゃんという子は三人の中の一番年下であるが「なに化けるものか」と平氣に言ってまた強く打てば猫はニャーニャーといよいよ窮した声である。三人で暫く何か言って居たが、やがて年ちゃんという子の声で「高ちゃん高ちゃんそんなに打つと化けるよ」と心配そうに言った。今度は六つになる高ちゃんという子が打って居るのと見える。ややあって皆々笑った。年ちゃんという子が猫を抱きあげた様子で「猫は、猫は、猫は宜しゅうござい」と大きな声で呼びながらあちらへ往ってしまった。

飯はまだ出来ぬ。

小さい黄な蝶はひらひらと飛んで来て干し衣の裾を廻ったが直ぐまた飛んで往て遠くにあるおしろいの花をちょっと吸うて終に萩のうしろに隠れた。

籠の鶉もまだ昼飯を貰わないのでひもじいと見えて頻りにがさがさと籠を掻いて居る。

台所では皿徳利などの物に触れる音が盛んにして居る。

見る物がなくなって、空を見ると、黒雲と白雲と一面に丑寅の方へずんずんと動いて行く。次第に

黒雲が少なくなって白雲がふえて行く。少しは青い空の見えるのも嬉しかった。

例の三人の子供は復^{また}我垣の外まで帰って来た。今度はごみため箱の中へ猫を入れて苦しめて喜んで居る様子だ。やがて向いの家の妻君、即ち高ちゃんという子のおっかさんが出て来て「高ちゃん、猫をいじめるものじゃありません、いじめると夜化けて出ますよ、早く逃がしておやりなさい」と叱った。すると高ちゃんという子は少し泣き声になって「猫をつかまえて来たのはあたいじゃない年ちゃんだよ」といいわけして居る。年ちゃんという子も間が悪うて黙って居るか暫く静かになった。

かッと畳の上に日がさした。飯が来た。

P84 ~ 86

[コメント]

正岡子規の随筆「飯待つ間」。ヒューマニティを実感できる名作。

- 2010年1月6日 林明夫記 -